

巻 頭 言

「子どもの^{あす}未来につなぐ医療・福祉・教育～医療的ケア児の学齢期の支援を考える～」

「勉強したい」「遊びたい」「外に行きたい」「みんなと一緒にしたい」は、しばしば子どもが発する言葉だ。私たちも、このような言葉を出しながら育って来たのではなかろうか。障害があるなしにかかわらず、この声の通り実際にできればと思う。

社会でバリアフリー、ユニバーサルデザイン、共生社会の創造と言われて久しい。確かに街中を見回すと、段差の解消などバリアフリー化が整備されているところも増えつつある。物理的な面の解消が進むことは目に入るものの、ソフト面のバリアの解消は思うようには進展しない。新聞を開くと、長期入院中の子どもの通学上の課題、たん吸引などの介助が必要な子どもの支援態勢の課題等が目に入った。私たちの目につきにくい点では、まだ多くの解決すべき課題が残され、子どもたちや家族は悩んでいるのだ。

今回の学術大会のテーマとして、「子どもの未来につなぐ医療・福祉・教育～医療的ケア児の学齢期の支援を考える～」を取りあげた。近年、医療的ケアを必要とする子どもたちの数が増加傾向にあり、その自宅や学校での生活を支えるためには、様々な支援が必要不可欠であるからである。実際に、家族の大きな負担、遊びや体験の場が限られていたり、また就学の問題など、多くの課題が存在する。それを解決するためには、多面的視点から医療的ケアを必要とする子どもたちの現状を理解し、支援方法を考える必要がある。とくに就学時に注目するのは、私たちと同様に、就学は子どもが社会に出る大きなターニングポイントとなるからだ。

この就学時を、どのように支えたらよいのだろうか。すべての子どもに共通する課題であるが、医療的ケアが必要な子どもの場合には、看護師、社会福祉士、教員など多くの分野の専門家の支援が必要だと思う。まさに、医療、福祉、教育との協働が求められているのである。そのためには、なによりも専門家同士の連携を深めることが重要で、子どもたちの豊かな生活を描き、それぞれの専門性を理解しつつ相互の関係を築くことにより、真の支援に繋がっていくのではないだろうか。すべての子ども達が、幸せな明日を迎えられるようにと願ってやまない。

最後に、学術大会を開催し多くの方々と有益な時間を過ごすことができました。講演者、シンポジスト、研究発表者、そしてこのテーマに関心を寄せ集っていただいた皆様方に、この場を借りて感謝申し上げます。みなさまの一人ひとりの力が、子どもたちの明日を築く源となることを信じております。ありがとうございました。

第16回学術大会長 白石 淳